

# 『余地』

～相談業務を楽しむ方法7～

## <いっぱいラーメン>

杉江 太郎

### ～勧誘的な研修～

この業界には、多くの技法や方法があり、その時代の流行りとともに新しく生まれ、そして古いものは廃れていく。また新しく発案された技法も、気付けば「版權」という問題が発生し、その使用権を巡って争いが生まれ、名前を変えながら、広まっていくということも少なくはない。そしてその度に、その技法の専門家が登場する。

私は、基本的に、「～法」「～方式」という理論のみに固執することに対して不信感を抱いている。これは、優れた理論を否定しているわけではない。理論あり気のある考え方や進め方を信用していないのである。

以前研修に参加したときに、事例報告をする報告者が、『～法を導入したらこんなにうまくいきました』『～法を信じてきて良かった』『みんな是非導入しましょう』というメッセージを強く発信していると感じることがあった。研修を終えた後、『宗教の勧誘のようだった』という感想を持って帰宅した。

当然、実践や理論に基づいた、素晴らし

い方法論であり、実際に導入をしたことで多くの成果を残していることは、周知の事実である

しかし、その方法論をマニュアル的に導入したから上手くいったのかと言われると決してそうではないはずである。その方法を導入することそのものが『専門的』と言わんばかりのその論法に嫌気がさした。方法論を導入するまでには、準備期間があり、その土壌の開発があり、そしてそれを維持するだけの努力や工夫があったはずである。そういった方法論以外の行動が見えなかったことで、方法論あり気にしか聞こえてこなかったのであろう。

### 『いっぱいラーメン』

とある児童養護施設に行った際の話である。施設の見学をさせてもらっているときに、ちょうど14時過ぎだったと思うが、子どもが2人向かい合って、カップラーメンを食べていた。昼食にしては、遅く、おやつにしては少し早いし、量が多い・・・なんてことを思っていると、子どもらは、見学者である私を気にすること

なく、マイペースにラーメンをすすっており、やり取りの中で、「自分で買った」「お腹空いたし食べてる」と教えてくれた。なんとゆったりとした時間を過ごしているのかと思っていると、指導員が子どもに対して「〇〇が呼んでる」「〇〇の準備」と声をかけられると、今までのんびりすすっていたラーメンを一気に平らげて飛んでいくように駆けて行った。

子どもが自分自身のペースで過ごしているかと思えば、大人との関係も構築されており、約束の時間を守るために、急いでラーメンを食べるなど、子ども自身の生活も安定しており、さらに大人との関係も安心できるものであると感じさせる場面であった。後から聞いた話だが、その子らは、不登校であるらしく、つまりは多くの子が学校に行っている時間にラーメンをすすっていたことになる。なんと安心して過ごしている不登校児なのだろうかと思心した次第である。

### ～既成概念とラーメン～

上記の状況に感心をしたという話をした際に、同じ業界の方から「けしからん」というニュアンスの返答があった。その人が言うには、施設にいる子どもが不登校になっているということが考えられない、そもそも本来なら学校に行っていないといけない時間帯に、ラーメンを食べさせているなんて、職員もなぜその状況を見過ごしているのか、普通なら自室

で過ごさせ生活に制限をかけるべきだ・・・ということらしい。

不登校であろうがなかろうが、ラーメンぐらい食べさせてあげようよと私は思ったが、その方の主張は、『学校を休む＝ダメなこと』なので、ダメなことをしている子どもに自由(＝ラーメン)を与えるべきではない、学校を欠席しているのであれば、病人と同じように自室で待機させなければいけない！ということであった。

面倒なので反論はしなかったが、いまだに、学校を行かなければいけない場所であり、不登校＝病気と捉えている方が同じ業界にいることに驚いた。一方で、もしかしたらそのような考え方は、私が思っている以上に浸透しており、私の感覚自体が少数派なのかも知れないとも思わされた。

子どもの視点で言えば、まずは安心して生活できるということが最も重要なことであり、特に施設で生活をしている子どもらは、様々な体験をした結果入所しているのであり、安心して学校に通えるだけのエネルギーが備わっていない場合も十分に考えられる。そのエネルギーを蓄えようと思うと、まずは自身が安心して生活できなければならず、自らが属している社会(この場合は施設)に対しても安心できる場所だと思える必要がある。その点で言えば、学校を休んでラーメンを食べている子どもにとっての施設は、

少なくとも安心してラーメンを食べられる環境であり、その生活に対する満足度は高いのではないだろうか。

### ～ラーメンと専門性～

そして冒頭の方法論ありきの考え方に違和感があったという話に繋がる。前述したラーメンのエピソードは、その一場面を切り取る限り、子どもにとって有益なものに見えた。そしてその施設の対応は、何かの方法論あり気の対応でないことは明白である。不登校の子どもにラーメンを食べさせるという方法論なんて聞いたことがない。

目の前の子どもにとって何が必要なのかと考えた結果、『学校を休むこと』と『お腹が空いたからラーメンを食べること』を選択した子どもを見守るという対応をしており、そのような大人のスタンスが子どもの安心感や施設への帰属意識等を高めているに違いない。方法論ありきのラーメンではなく、ラーメンを食べさせるという選択が結果として方法論として確立されていくのである。

児童相談所では、専門性が必要だと議論されていると聞く。さて、児童相談所に求められる専門性とは一体何なのであろうか。専門性を高めるためにどういった議論がされているのであろうか。少なくともその議論されている専門性の中に『ラーメン』という語彙はないはずである。

ここでは、私自身が必要だと考える具体的な専門性については述べない。そのことはまた別の機会にしたいと思う。

この専門性とは、専門性ありきで議論されるようなものではなく、良い事例を振り返ったときに、結果として『専門性』が発揮されていたと気付かされるようなものであると思う。またそうであって欲しいと願う。

偉い人たちが求めている専門性についてのみ追求することが、子どもの為になるとは思わない。

児童相談所を取り巻く環境下には、様々な方法論があふれている。またブームのように、生まれては消え、生まれては消えを繰り返している。その中で、不変のものはどの程度あるのであろうか。

児童相談所に求められるニーズもこの数十年で大きく様変わりしている。その中で不変のものはいったい何であろうか。私自身は、『目の前の子どもの生活を少しでも快適にする』『子どもの将来の生活を少しでも良くする』という使命だと思っている。

その使命に基づいて対応した後で、『専門性』が発揮されたかどうか問われるべきであり、『専門性』あり気で子どもに関わるべきではないと思っている。私は、偉い人が求める『専門性』ではなく、いっばいのラーメンや、そのラーメンを食べられる環境を大切にしたい。